「迷路」を抜けて

― Keats の *Endymion* 試論―

小　塚　和　博

John Keats の *Endymion: A Poetic Romance* は，羊飼いの王子エンディミオンが自分の夢の中に現われた Cynthia あるいは Phoebe（以下，月の女神と明記する）を求めて，地上・地下・海底・天空を彷徨する物語詩である。[(1)]だが，彼の求める月の女神は，彼とは次元の違った世界にいる。それゆえに，二人の間には確固とした「境界」が存在していると言える。『エンディミオン』の第四巻の最後で，二人はともに天空へと消えていくことになり，彼らの間の「境界」は消失することとなる。つまり，エンディミオンによる月の女神探求の物語は，この「境界」の出現から消失という一つのパターンを完成させる物語だと言える。

本稿では，この旅の過程において構造上見られる特質を，巻を追って考察していくことにする。その際に，エンディミオン自身に成長が見られるかどうかも考えていきたい。それはロマン派における「内」と「外」の問題とも関わってくるにちがいない。

I

第一巻には，エンディミオンが月の女神との三度の出会いを，妹 Peona に話して聞かせる場面がある。その話の中で彼が最初に月の女神に出会う前に，実は少々不思議なことが起こっている。彼は疲れた夕べをしばしば過ごす場所で，'There blossomed suddenly a magic bed/ Of sacred ditamy and poppies red' (Ⅰ.554－555)[(2)]という現象を目撃し，やがて眠りにおちる。実を言えば，彼はその場所へ行くのに「川」によって導かれたのであった。'from a certain spot, its winding flood/ Seems at the distance like a crescent moon' (Ⅰ.543－544)とあるように，この「くねくねとしている」川によって，エンディミオンはこの不思議な体験をする場所へと運ばれるのである。我々はそこを「異界(アザー・ワールド)」と呼んでもいいだろう。眠りにおちた後，彼は 'Spreading imagenary pinions wide' (Ⅰ.586)の状態で飛翔を始めて，その最中に彼は月の女神に二度会うことになるのだ。我々が「異界」と呼ぶこの場所は，前に述べたようにエンディミオンにとって，よく訪れる，よく知った場所なのである。しかし，敢えてそれを「異界」と規定する理由は，単にそこで起こっているできごとが，非日常的なものであるということを根拠にしているからにすぎない。あるいは，その場所が質において高次なものとなったとも考えられうる。

三度目の出会いには案内人が登場する。それは 'A cloudy Cupid' (Ⅰ.889)である。この不思議な案内人に突然遭遇して，エンディミオンは喜んでそれを追いかける。すると行き着いた「泉」の中に彼は月の女神が映っているのを見る。そもそも彼が「雲のキューピッド」を見かけた場所もまた，彼がしばしば訪れる場所であった。そこへ行くために，エンディミオンは峨々たる岩々や複雑に草木がはびこったところや，朽ちかけた階段などを通らなければならなかった。ここを通って，彼は再び「異界」へといざなわれたのである。

これらの三度の出会いを考え合わせてみると，次のようなことが言える。「くねくねとしている」川だとか，人が簡単に通り抜けることができそうもない複

雑に草木がはびこったところだとかは，そこに入りこんだ人を迷わせる空間であり，その人の中心を喪失させる空間である。しかしそこを抜け出すと，抜け出た人には「異界」が待ちかまえているのだ。たとえて言うならば，この空間は，入り組んだ「迷路」の道から中心のゴールへと，「迷路」の中をさまよい歩いている人が突然に飛び出るのと同じ機能を持っているのである。エンディミオンが月の女神に出会うためには，少なくとも第一巻では，「迷路」のような空間を抜けて，「異界」へと進んでいくことが必要なのである。

第一巻には「雲のキューピッド」のように，結果的にエンディミオンを「異界」へと導く役割を担うものが登場する。それは彼自身の「槍」である。意気消沈したエンディミオンはさまよい歩きながら，無造作に自分の持っている「槍」を何度も放り投げて，それについて進んでいく。すると彼はある洞穴に連れていかれ，そこが何処であるかを決定できないまま，ある声を聞くことになる。この声の持ち主は，間接的に彼に探求の旅を決断させる。つまり，エンディミオンに対して旅を始めよといった類いの，はっきりとした命令ではなく，エンディミオンがこの声を聞いたという事実によって，彼は月の女神探求の旅の開始を決意したというのである。「槍」という媒介を通して示された，曲折していると推定される道程を，先に述べたように「迷路」あるいは「迷路的様相」と呼ぶことが許されるのであれば，それは彼を再び「異界」へと連れていったばかりでなく，究極的には彼の巡礼の旅の推奨者の機能も備えていることになる。

一方ピオナは，エンディミオンと月の女神の関係をどのように見ているのであろうか。彼女は兄の長口上の途中，一言で次のように言っている，'Endymion, how strange！ / Dream within dream！'（Ⅰ.632－633）と。つまり，彼女はエンディミオンと月の女神の出会いを，「夢の中の夢」だと決めつけているのだ。ピオナにとって，エンディミオンの恋人としての月の女神は，実体のない夢にすぎないのだ。さらにピオナは彼の話の合い間を縫って次のように言う。

how light

Must dreams themselves be, seeing they're more slight

Than the mere nothing that engenders them !
Then wherefore sully the entrusted gem
Of high and noble life with thoughts so sick ?
Why pierce high-fronted honour to the quick
For nothing but a dream ?
(Ⅰ.754－760)

ピオナはエンディミオンと月の女神の関係に否定的なのである。エンディミオンの夢に対する価値観と，ピオナのそれとの間に違いがあるのだ。ピオナには，夢は現実を喰い尽くすものとして映っているのだ。しかし，果たして彼女はエンディミオンにとってそれだけの存在なのだろうか。

キーツの構想したエンディミオンは，本来羊飼いたちによって取り行なわれる牧神 Pan への祝祭の中心人物となるはずであった。(3)しかし，実際の彼は，我々が見てきたように，月の女神との三度の出会いのために放心状態に陥ってしまっていた。そんな彼を 'a bowery island' (Ⅰ.428)へと連れてきたのは他ならぬピオナであった。彼はこの「あずまやの島」で再び生気が甦り，彼女に自らの経験を語ったのである。

『エンディミオン』より後に書かれた物語詩 "Isabella; or, the Pot of Basil" において，恋人同志のイザベラと Lorenzo が，彼女の残忍な二人の兄達の目を逃がれて逢瀬を重ねる場所は，'a bower of hyacinth and musk' (1.85)であった。つまり，イザベラとロレンゾは「あずまや」という「境界表象」の内なる空間にいる。そこでは，外なる空間は画然と分けられ排除されている。これと比べると，『エンディミオン』の第一巻の「あずまや」は，エンディミオンの月の女神探求の旅の出発点になっている。だからピオナは間接的にそれを認め，勧めていることになる。ピオナは，エンディミオンと月の女神の関係を直接的に否定し，かつ間接的に肯定しているのである。エンディミオンはいよいよ「あずまや」という「境界表象」の内なる空間から外なる空間へと出発することになる。(4)

II

第二巻でもまた，エンディミオンは三度「異界」へと連れていかれることになる。その際に，我々が第一巻でみた構造上の特徴と，どのような違いが見られるのであろうか。

最初の例は第二巻の冒頭のあたりに見られる。そこでは，'For many days/ Has he been wandering in uncertain ways' (Ⅱ.47－48)と描かれている。エンディミオンの彷徨している道が，彼にとって「不確かな」ものであることに注目したい。言い換えれば，それは彼には見知らぬ道なのである。言わば，彼は自らの中心を喪失したような空間にいるのである。しかし，その後泉のほとりに腰を下ろしたエンディミオンは，再び不思議な光景を目撃する。

and he doth see

A bud which snares his fancy. Lo！ but now
He plucks it, dips its stalk in the water－ how
It swells, it buds, it flowers beneath his sight！
And, in the middle, there is softly pight
A golden butterfly
(Ⅱ.56－61)

この不思議な蕾から生まれた「金の蝶」は，エンディミオンの新しい案内役になるのである。彼はこれを軽やかに追いかけるが，「金の蝶」は消えてしまう。しかし，「金の蝶」はすぐさまニンフに姿を変えて，エンディミオンの前に姿を現わし，彼に次のように忠告する。

that thou must wander far

In other regions, past the scanty bar
To mortal steps, before thou canst be ta'en
From every wasting sigh, from every pain,
Into the gentle bosom of thy love.

(Ⅱ.123−127)

このニンフはエンディミオンに月の女神探求の旅を続けるように勧めているのである。つまりニンフは，彼が「あらゆる消滅的な嘆息やあらゆる苦痛から，あなたの恋人の優しい胸へと連れていかれる」まで，旅を続けるがよいと言っているのである。「不確かな」道，あるいは以前に述べた言葉を使えば，エンディミオンの中心を喪失した状態にさせる「迷路」によって，彼は「異界」へと導かれて，そこで旅への確信をつのらせることになる。ここでも「迷路」は，第一巻と同様に，旅の推奨者の機能を果たすことになる。ただし，第一巻と違うところは，月の女神と会うことがなかったという点である。

エンディミオンが二度目に「異界」へと導かれる箇所は，『エンディミオン』の中に組み込まれている三つの挿話のうちの最初のもの，すなわち Venus と Adonis のそれと関係している。旅を再開したエンディミオンが，'Through winding alleys' (Ⅱ.384)進んだり，'After a thousand mazes overgone'(Ⅱ.387)すると，彼は何人かのキューピッドたちに出会い，芳しい香りのする部屋に行き着く。そこで彼は初めて眠っているアドニスに出会う。まさしくこの空間は「異界」であって，彼はまた先に引用した箇所にあるように，「迷路」によってそこに導かれている。ただし今回は案内役は登場していないが，エンディミオンへの忠告者は現われる。それは神話にあるように，アドニスを連れにやってきたヴィーナスである。彼女はエンディミオンに次のように言葉をかける。

Endymion, one day thou wilt be blest.
So still obey the guiding hand that fends
Thee safely through these wonders for sweet ends.
(Ⅱ.573−575)

究極的にはヴィーナスもエンディミオンの月の女神探求の旅の推奨者なのだ。ただし彼女も 'a concealment needful in extreme' (Ⅱ.576)，すなわち彼の恋人を何処に求めたらよいのかを明らかにしてくれない。ただ「導く手に従う」ことを命じているのだ。この二度目の「異界」への来訪では，そこへの案内役を欠いていたし，月の女神との出会いもなかったけれども，彼はあくまでも旅の

推奨者を欠くことはないのである。

ヴィーナスはエンディミオンに上の引用のように告げた後，アドニスとともに天へと消えていく。つまりこの二人の挿話は，エンディミオンと月の女神の物語のヴァリエーションになっているのだ。少なくとも彼がこの二人の愛の瞬間を目撃したことは，彼の旅への確信を深めさせるのに役立ったことは確かである。(5)

エンディミオンの三度目の「異界」への侵入は次のようにして起こる。彼が 'wound/ Through a dim passage, searching till he found/ The smoothest mossy bed and deepest' (Ⅱ.708－710)した挙句に，その「寝床」で the known Unknown の訪れを感じる。それは両腕を伸ばして安らいでいるエンディミオンのところに，突然にやってきた見知らぬ女神なのである。

long time they lay
Fondling and kissing every doubt away;
Long time ere soft caressing sobs began
To mellow into words, and then there ran
Two bubbling springs of talk from their sweet lips.
(Ⅱ.734－738)

エンディミオンとこの女神の関係は，彼と月の女神との，どちらかと言えば精神的な関係と比べて，(6) 官能的・肉体的であると言える。もちろんこの「知られたる知らざるもの」とは，月の女神の化身なのであるが，彼女は自分のアイデンティティを彼に告げることをしない。むしろ，'I.../... nor for very shame can own/ Myself to thee' (Ⅱ.777－779)と述懐する。たとえ彼女のアイデンティティが彼には隠されているとしても，二人は再びこの「寝床」で出会うことができたのである。ある意味では，この「寝床」は彼らの「あずまや」なのである。すなわち，彼らは「あずまや」という「境界表象」によって，その外なる空間から融絶された場所にいるのだ。また，エンディミオンがそこへ行くのに「曲がって行」ったことをかんがみれば，「迷路(的様相)」がここでも必要とされ，「異界」への通路になっていたことがわかる。しかし，この女

神はすぐにエンディミオンのもとを離れていき，彼は意気消沈したまま，旅を続けることになる。

Bloom は第二巻を評して次のように言っている。

> 第一巻では探求の旅の性的な誘いがクライマックスに達し，第二巻になるとその性的な完遂を見ることになるが，それは離別を新たにすることになる。(7)

つまり第二巻で月の女神は「知られたる知らざる」女神の姿になって，エンディミオンの前に姿を現わしたのは，彼の旅の終わりを告げるためではなく，第一巻で見られた二人の精神的な関係の裏面にあった肉体的な誘いを完遂させるためだったというのである。

第二巻でも，第一巻のような，エンディミオンによる「迷路」から「異界」への侵入という構造上の特質が見られた。しかしこの巻の旅程は，エンディミオンに旅の成功を確信させる側面も持っていた。その一方で，第一巻とは違って彼は月の女神に直接会うことがかなわず，彼女の化身である「知られたる知らざる」女神に出会うことになった。それはエンディミオンと月の女神の関係を，我知らずのうちに肉体的なものとして完成させはしたものの，彼自身には何ら寄与していない。何故なら彼は彼女の正体を見抜けず，ただ旅を続けるばかりであるからだ。

Ⅲ

第三巻では，エンディミオンは初めから海底という「異界」をさまよっている。むしろ第三巻のすべてのできごとが，「異界」で起こっているのだ。

第二巻の終りに近いところで，彼は川の神 Alpheus と森の精 Arethusa の声を聞き，(8)その川の神に導かれたかのように海底へと進んできたのであった。そしてそこで彼は，船の残骸や，人間や獣の骨の間を通り抜けようとする。この光景はエンディミオンの心に 'A cold leaden awe' (Ⅲ.136)を注ぎこもうとするが，逆に彼は心を爽快にして旅を続ける。つまり実際の彼の辺りの海底の風

景は，彼を迷わせる仕掛けとして提示されているのであるが，彼は月の女神の影響の下に保護されているのである。彼はここで人を迷わせるという，従来の機能をもつ「迷路」の風景の中を進んでいるのだ。この「迷路」を通って，エンディミオンは Glaucus と Circe の第三の挿話を聞くことになる。彼は以前の二巻と比べて，「異界」での滞在時間がずっと長くなるのである。この「異界」でエンディミオンは一人の老人と出会う。この老人こそ魔女サーシィによって恋人 Scylla を殺され，彼自身も老いたる姿に変えられたグローカスなのである。グローカスの話によれば，彼がサーシィの正体を見てしまう森は，そこに住んでいるりすや狐などの動物たちの 'the mazy forest-house' (Ⅲ.468)と言い表わされ，まさしくグローカスを迷わせる森であることがわかる。すぐさま彼は魔女から逃げ出そうと考えたが，うかつにも 'Into the dungeon core of that wild wood' (Ⅲ.565)と逃げてしまう。彼は「迷路」としての森を抜けられないのだ。

エンディミオンがグローカスに対して果たす役割は，彼とシーラの魔術を解くことである。第二巻のヴィーナスとアドニスの関係が，エンディミオンと月の女神のそれのヴァリエーションになっていると前に述べた。一方，グローカスとサーシィの関係は，否定的なヴァリエーションであると言える。その否定的なヴァリエーションを崩し，別なヴァリエーション，すなわちグローカスとシーラの関係を再構築することをエンディミオンは目指す。彼は彼らの仲介者となるのである。結局，彼は彼らの魔術を解くことに成功する。それは以前の二巻と違って，エンディミオン自身が案内役になっていると言える。換言するなら，彼は第三者として「異界」に侵入し，その重責を果たしているのであって，彼自身の旅そのものに進展は見られない。ただそれは我知らずのうちに，彼自身の旅の成功を彼に予期させうるだけである。

サーシィの魔術の解けた後，海神 Neptune の宮殿で，エンディミオンはもう一度ヴィーナスから，'A little patience' (Ⅲ.908)とか 'wait awhile expectant' (Ⅲ.916)とかいうような忠告を受ける。ここから再び，エンディミオン自身の物語になっていく。ネプチューンの宮殿での宴の最中に，我々はエンディミオ

ンの様子だけが違っていることに気付かされる。果たして 'At Neptune's feet he sank' (Ⅲ.1013)となってしまう。Nereids が彼を 'a crystal bower' (Ⅲ.1018) へと連れていくと，エンディミオンに生気が甦ってくる。これは我々がすでに第一巻で見てきたことの繰り返しである。すなわち，エンディミオンが牧神パンの祝祭の際に倒れて，ピオナによって「あずまやの島」へと連れていかれて，そこで生気を取り戻したというプロットの繰り返しである。グローカスとシーラの再会の仲介者となったことで，エンディミオンは自分の旅の確信を無意識的に深め，再び「あずまや」に戻ることで旅のやり直しを図ることになる。

第三巻のすべてのできごとは「異界」で起こっていると前に述べた。そしてこの巻のもう一人の中心人物とも言えるグローカスのもとに行くために，エンディミオンは「迷路」の風景の中を進んできた。これは前の二巻で見られた「迷路」から「異界」へという構造上の特質の変型になっている。ここまでのエンディミオンの旅全体をみると，彼は，月の女神を求めて上に指向していない。Northrop Frye の言うように，その前に彼は下に向かわねばならなかったのである。(9)そこで彼がグローカスとシーラという，彼と月の女神の肯定的なヴァリエーションと言える関係を復活させたこと，さらにヴィーナスからの忠告といった彼の旅の成功を確信させるための知識が必要とされたのである。

Ⅳ

第四巻でエンディミオンは地上に戻ってくる。この地上でも彼は非日常的な体験をする。言わばまだ彼は「異界」にいるのだ。そしてこの「異界」で，最初の上への指向が試みられる。それはエンディミオンが地上で知り合った the Indian Maiden と共に，Mercury の呼び出した二頭の駿馬に乗って天空を翔けるという方法によってなされる。第一巻でエンディミオンが月の女神と初めて遭遇した時も，彼は空中を飛翔していた。空中とは，この場合，"a source of vision"(10)だと言える。しかし第四巻ではヴィジョンの喪失を見ることになる。(11)つまり，二人が飛行中，月が昇ってきたことで，彼は 'her body fading

gaunt and space/ In the cold moonshine' (Ⅳ.507－508)のを見てしまう。これはインドの乙女が実は月の女神であるという証左であることはいまさら言を俟たない。もっとも彼はまだそのことに気づいていないのであるが。

しかし第四巻には，エンディミオンの救済所が設けられている。それはインドの乙女を失った後に，彼が入っていく the Cave of Quietude である。この「静寂の洞穴」とは望むものなら誰でも，そこへ入ることができるという類いの洞穴ではない。'on the sudden it is won' (Ⅳ.532)のであり，それは 'a den to save the whole' (Ⅳ.544)なのである。そこへ行くことを別に望んだわけではなかったエンディミオンは，そこに入り自分の魂を慰めてもらうことになる。その洞穴は彼にとって，空中に空間的に存在する魂の治療所であると同時に，絶望を乗り越えるための彼の内なる能力の別称であるとも言える。しかし，上への指向の試みから地上へ再び戻ってきたエンディミオンは，インドの乙女と生きる決意をする。言わば，天上の愛ではなく地上の愛に目を向けるのである。たしかに，彼はそこを通り抜けることで，彼の意気消沈した魂は安らいだものの，それはエンディミオンをして月の女神探求の旅を地上のインドの乙女探求の旅へと変えさしめたのである。ただ，インドの乙女が本当は月の女神であるということから，この洞穴は彼の旅の究極的な目的を達成させるために，間接的な機能を負うていることになる。

エンディミオンはインドの乙女と再び会うが彼女は彼の求愛に対し，'I may not be thy love' (Ⅳ.752)と答えるのみである。つまり，第四巻では彼はインドの乙女を自分のものにできるという期待と，彼女を失うという現実を繰り返しているにすぎない。[12]この地上的な愛の所有の期待とそれの現実的な消失の繰り返しは，「異界」で起こっているのであるが，二人がピオナと出会うことで我々は円環的に最初の場所へと戻ってくることになる。ピオナは以前と違って，兄の新しい恋人が 'our queen' (Ⅳ.817)になってくれることを望んでいる。何故ならピオナには，インドの乙女が第一巻における月の女神のような「夢の中」の存在ではないように思えるからである。ピオナにとってインドの乙女は，実体のある存在として認識できる対象なのである。ピオナは二人の関

係を第四巻では全面的に容認する。

ピオナの推奨も一旦はインドの乙女によって拒否される。しかし，エンディミオンの嘆きを聞いて，乙女は自分のアイデンティティを彼に明らかにする。ここで彼女の現実的な消失が終わり，彼は自分の恋人の所有を現実のものとする。

into her face there came
Light, as reflected from a silver flame.
Her long black hair swelled ampler, in display
Full golden; in her eyes a brighter day
Dawned blue and full of love. Aye, he behld
Phoebe, his passion !
(Ⅳ.982－987)

彼女のアイデンティティを隠していたものは，彼女の 'foolish fear' (Ⅳ.989)と 'decrees of fate' (Ⅳ.990)であったと彼女の口から彼は告げられる。そしてエンディミオンは月の女神とともに天空へと消えていくことになる。

第四巻でのできごとはすべて「異界」におけるできごとであった。それは，前三巻のいずれにも見られた「迷路」から「異界」へという構造上の特質をとることなくなされてきたと言える。「迷路」という空間を通過しなくとも，彼は二人の間の「境界」の喪失という，パターンの完成を遂げられたのである。我々が見てきたように，彼にとってインドの乙女＝月の女神を獲得する術策は，かん難辛苦に充ちたものであった。何故なら，彼女の所有と消失の繰り返しが常に彼につきまとっていたからである。それはあたかも彼が，空間的・物理的な「迷路」ではなく，心理的・精神的な「迷路」をさまよっていたかのごとくである。この意味において，再び我々は第四巻にもまた「迷路」と「異界」の別な形態での相互関係が展開されていたのを目撃することになる。エンディミオン自身について言えば，この巻では彼は「境界」の出現と消失というパターンをただ単に完成させた人物にすぎないように思われる。つまり，彼はこの巻の初めからまったくの成長をしないまま，月の女神とともに天へと昇っていっ

たのである。

V

『エンディミオン』は全巻を通じて，同名の主人公が「迷路」を通って「異界」へと導かれて，そこで彼に対して何らかの影響を及ぼすできごとが，彼自身によって体験されるという構造を持っている。たとえ月の女神のアイデンティティがエンディミオンに隠されたままだとしても，その構造は月の女神との接触とそれに引き続く旅への意欲を，エンディミオンにもたらした場合もあれば，月の女神を失うことによって彼を意気消沈させ，旅を続けさせるという結果に終わることもあった。だが，エンディミオンは全巻を通じて成長することはなく，ただ月の女神との合一を果たすのみである。

Paul de Man がキーツの詩空間を評して次のように言っている。

> 彼(＝キーツ)は敷居まで辿り着き，彼がまだ開発しようとしていないが，彼の努力がすべてそちらに向けられようとしている新しい地域の境界を見通していた。(13)

エンディミオンの旅は，まさしくド・マンの言うような「まだ開発しようとしていない地域」を探索する旅なのであり，彼の言う「敷居」とは，エンディミオンと月の女神との間の「境界」だと言い直せるだろう。エンディミオンのすべての努力は月の女神との合一，すなわち二人の間の「境界」の喪失に向けられ，その仕掛けとして「迷路」から「異界」へという構造が選ばれたのである。

ロマン派の「内」と「外」の問題をフライは新しい神話体系として導入した。その際に彼は「内」なる世界を自然あるいは神との合一の世界として定義し直したのであるが，エンディミオンこそ，まさに月の女神との霊的交渉を目指した「内」なる存在だと言えよう。(14)しかし，「内」なるエンディミオンにとって，月の女神探求の旅の形式を取ることで，霊的交渉を完成させる以外になんら彼自身の発展がなかったことも事実なのである。

注

(1) 『エンディミオン』は従来，大きく分けて二通りに解釈されてきた。一つは，詩人の魂の象徴であるエンディミオンによる，理想美を象徴する月の女神探求の物語だとするアレゴリー説である。これを唱える批評家としては，F.M. Owen, *John Keats: A Study* (London: Kegan Paul, 1880), E. de Selincourt, ed., *The Poems of John Keats* (London: Methuen, 1905), Sidney Colvin, *John Keats* (New York: Oxford Univ. Press, 1926), Robert Bridges, *Collected Essays Papers & C*, vol. 4 (London: Oxford Univ. Press, 1933), C.L. Finney, *The Evolution of Keats's Poetry*, vol. 1 (New York :Russell & Russell, 1936)などがいる。もう一つは，そのアレゴリー説を否定して，エンディミオンと月の女神のラヴ・ロマンスだとする説である。これを唱える批評家は，Amy Lowell, *John Keats*, vol. 1 (London: Jonathan Cape, 1924), N.F. Ford, *The Prefigurative Imagination of John Keats* (California: Stanford Univ. Press; London: Oxford Univ. Press, 1951), Jacob D. Wigod, "The Meaning of *Endymion*," *PMLA* vol. LXVⅢ (1953), John Middleton Murry, *John Keats* (London: Jonathan Cape, 1955), E.C. Pettet, *On the Poetry of Keats* (London: Cambridge Univ. Press, 1957), Clarisse Godfrey, "*Endymion*," in *John Keats: A Reassessment*, ed. by Kenneth Allott (Liverpool: Liverpool Univ. Press, 1958)などがいる。しかし最近はアレゴリーの問題を扱った論文はあまりなく，Stillinger が言うように，"the question of whether or not the poem is allegorical is no longer an issue,… the main problem is... the interpretation of the allegory" なのである (Jack Stillinger, *The Hoodwinking of Madeline* 〔Urbana, Chicago and London: Univ. of Illinois Press, 1971〕, p.15)。本稿は，Northrop Frye, *A Study English Romanticism* (1968; rpt. Sussex: The Harvester Press, 1983)に負うているところが多い。

(2) テキストは Miriam Allott, ed, *Keats: The Complete Poems* (London: Longman, 1970)による。

(3) 具体的には，パン祝祭の司祭が 'we have had/ Great bounty from Endymion our lord' (Ⅰ.218－219)と言っているところから理解される。

(4) キーツの詩における「あずまや」の意義については，Morris Dickstein, *Keats and His Poetry* (Chicago and London: Univ. of Chicago press, 1971), pp.53－129参照。

(5) Bate はここらあたりの事情について，"The sight gives Endymion further encouragement; for there are parallels between Adonis' situation and his own" と言っている。W.J. Bate, *John Keats* (Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. press, 1963), p.185。

(6) 第一巻でエンディミオンが飛翔中，二度目の月の女神との出会いの際，二人の間にわずかに肉体的な接触がある。具体的には，'Madly did I kiss/ The wooing arms which held me' (Ⅰ.653－654)の箇所が挙げられる。

(7) Harold Bloom, *The Visionary Company* (Ithaca and London: Cornell Univ. Press, 1961), p.373。

(8) この第二の挿話では，アレスーザがアルフィアスを拒否することで，後に見るように the Indian Maiden とエンディミオンの関係を暗示している。また二人は彼と月の女神との否定的なヴァリエーションだとも言えよう。

(9) Frye, p.135.

(10) James Land Jones, *Adam's Dream* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1975), p.96。

(11) ただし，エンディミオンはこの飛翔中眠りにおち，彼の夢の中で「知られたる知らざる」女神が月の女神であることに気づく。具体的には，"They 〔＝divine powers〕 smile. '…/ … Dost thou 〔＝Endymion〕 not know/ Its mistress lips? Not thou? 'Tis Dian's …. / …. ' He looks,'tis she, /His very goddess" (Ⅳ.427－431)の箇所が挙げられる。

(12) Waldoffは『エンディミオン』に見られる psychlogical pattern を次のように言っている。'first, a consuming melancholy, or love-lorn state; then a brief hope, usually experienced in a vision of the quest object or in anticipation of a

permanent union; and then a return to "melancoly" (Ⅱ.868), or "Despair" (Ⅳ.506), when the desired object disappears.' Leon Waldoff, *Keats and the Silent Work of Imagination* (Urbana and Chicago: Univ. of Illinois Press, 1985), p.42.

(13) Paul de Man, "The Negative Road," in *John Keats*, ed. with an introduction by Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1985), p.31.

(14) Frye, pp.46-47.